

定信紀行

第一話

田安德川家のこと
〜江戸城田安門〜

寄稿 市文化財保護審議会委員
佐川 庄司

松平定信は、徳川御三卿の一つである田安德川家の七男として宝暦8年（1758）12月27日に生まれた。幼名は賢丸。御三卿とは、8代將軍徳川吉宗が將軍家と御三家の血縁関係が薄くなってきたことにより、自身の血筋をもつて將軍家を継承する目的をもって創設したとされる。三男宗武は田安家、四男宗尹は橋家、9代將軍家重の次男重好は清水家を創設し、それぞれ江戸城内に屋敷があった。田安家は、現在の日本武道館のある北の丸公園内にその屋敷地があった。江戸城内の北の丸に通じる門が田安門で、重要文化財の建造物として現存する。若き日の定信もこの門の下を行き来していたことであろう。

さて、賢丸（定信）は、田安家において將軍職を継ぐ人物として幼少期よりさまざまな帝王学を学んだ。定信の回想によれば、年に400巻の本を読破したという。すでに12歳の時に人として守るべきモラルを列記した『自教鑑』

を著し、また、いかにして世の中を治めて庶民の生活を安らかにするかという経世済民の哲学もこの頃に身に付けていたと思われる。後に士民共衆を掲げた南湖公園の創出へとつながっていく。

このように才知に富んでいたことから10代將軍家治の後継と目されていたが、17歳の時に白河藩久松松平家へ養子となることが決まった。この背景には諸説があるが、久松松平家の家格上昇への目論みもあったとされている。

問 観光課 ☎2855526



▲江戸城田安門
(写真提供／(一社)千代田区観光協会)

白河かるた

札でつながる今・昔

一枚目

「おとめ桜」



白河小峰城は石垣の美しさから、盛岡城、鶴ヶ城に並び「東北三名城」と称され、桜の名所としても有名です。

なかでもひととき目を引くのが、三重櫓の傍らにたずんでいる「おとめ桜」ですが、この桜には、ある物語が伝えられています。江戸時代、白河藩主丹羽長重は小峰城の改修工事を進めていましたが、石垣が何度も崩れてしまう状況に悩まされていました。そこで、工事が無事に進むことを祈願し、人柱を立てることにしました。そして、誰にするのか、家臣たちは協議の結果、朝一番に城に入った若い娘を

涙誘う

おとめ桜の

悲伝説

人柱にすることにしました。果たして、誰が入ってきたのか、皮肉にも人柱を協議した家臣の娘である「おとめ」だったのです。

その後、人柱が立てられた場所の石垣は二度と崩れなかつたそうです。おとめの悲しい境遇を悼み、人々は一本の桜を植えました。これが「おとめ桜」と呼ばれるようになりました。

この「おとめ桜」は戊辰戦争の際に焼失してしまいました。現在は2代目のおとめ桜が、可憐な花を咲かせて三重櫓を彩っています。

問 まちづくり推進課
☎285533

お知らせ

ラウンジ

りぷらん

子育て情報

保健情報

くらしの情報館

定信紀行

白河かるた

休日当番医・無料相談ほか

市長の手控え帖